

うなさか 海界の風景

（ハーンとチェンバレン それぞれの浦島伝説）（一）

牧 野 陽 子

- 一、ラフカディオ・ハーン「夏の日の夢」と浦島物語
- 二、ジャバノロジストたちの「水江浦島子を詠める歌」

- 三、チェンバレンの『日本の古典詩歌』
- 四、それぞれの海界と浦島幻想

一、「夏の日の夢」と浦島物語

小泉セツが『思い出の記』のなかで、ラフカディオ・ハーンの好きだったもの、怪談、虫、杉木立、夏、西の方角、夕焼け、海、遊泳、浴衣、白足袋、などを次々にあげて、それにまつわるエピソードを語っていくな

海界の風景（一）

かで、つぎのような印象深いくだりがある。セツはこう述べている。

日本のお伽噺のうちでは、「浦島太郎」が一番好きでございました。ただ浦島と云ふ名を聞いただけでも「ああ浦島」と申して喜んでおりました。よく廊下の端近くへ出まして、「春の日の霞める空に、すみの江の……」と節をつけて面白そうに毎度歌いました。よく暗誦していました。それを聞いて私も暗ずるやうになりました程でございます。上野の絵の展覧会で、浦島の絵を見まして値も聞かないで約束してしまひました。⁽¹⁾

廊下にたたずみ、縁側から外をながめて、浦島の歌を口ずさむハーン。そしてその姿を、そつと見やるセツ。『思ひ出の記』の魅力のひとつは、淡々とした語り口で短いエピソードを列挙していく、『枕草子』にも似た手法であり、セツはハーンの内面には踏み込まず、解釈もほどこさない。シンプルなスナップショットは、しかし、鮮やかに、ハーンの生活の一瞬を照らします。そして、ここで注目すべきは、簡単な「へるんさん言葉」ばかり話すように伝えられてきたハーンが、『万葉集』の長歌を日本語原文のまま暗記していて、しかもそばで聞いているものが覚えてしまうほど、繰り返し朗唱していたといつことだろう。

ハーンは、浦島伝説に何を想い、何を考えたのか。

ハーンが浦島伝説を取り上げたのは、「夏の日の夢」⁽²⁾ “The Dream of a Summer Day” という熊本時代の作品においてである。明治二十六年（一八九三年）の七月、ハーンは熊本から長崎へ一人旅をした。それは松江中学校から熊本の第五高等学校へ転任して二年目の夏のことだ、長崎からの帰途、^{みすみ}三角港でたまたまハーンが休憩したの

が浦島屋という名の宿だった。ハーンは浦島の物語を思い出し、さらに浦島をめぐる夢想にひたりながら人力車を走らせて熊本へと帰っていった。来日第二作の作品集『*Out of the East*』『東の国から』(一八九五年)の巻頭に置かれた「夏の日の夢」は、このときの体験をもとにした紀行文という枠組みのなかに、伝説の再話と伝説をめぐる随想を組み込んだ印象的な作品である。「紀行文として著者のもっともすぐれたもの」(田部隆次『小泉八雲』)ともされてきたが、遠田勝氏が指摘するように、単なる紀行文というには、浦島伝説の再話と随想の部分の比重が大きい。⁽³⁾

作品の冒頭、ハーンは「旅館は極楽、女中さんたちは天女のようにだった」と長崎の近代的な西洋風ホテルから逃げ出すようにして到着した、海辺の風雅な宿の描写から話を始める。海岸の眺めは美しく、もてなしも気がきいていて、たおやかな女主人が美しい声で宿の名は浦島屋だと告げると、あたりに魔法がおりたようになって、ハーンは、物語を思い出した、という。

この短い導入部に続いて、浦島伝説が語られ、その後、ハーンは女主人が手配した人力車に乗りこむ。浜辺の道を揺られながら、「すべてが青のなかに浸された、果てしない光の世界」へと夢想を馳せる。ハーンは夢想のなかで雄略帝の時代に戻って、乙姫と言葉を交わり、ついで浦島伝説に関わる民俗行事として松江で見た浦島踊りや、浦島明神信仰に言及する。また、幼いころ母と過こしたギリシャの日々の回想であるとされる、記憶の底の太陽と海の心象風景を語り、さらに山裾の村の池の端で休憩したおりに、「若返りの泉」の民話を思い出す。一方、道中の村々では雨乞いの太鼓を打っていて、その音が響いてくる。人力車の車夫はあまりの暑さに交代するのだが、ハーンは、女主人に最初に言われた通り七十五銭を払い、ハーンをのせた人力車が「赫々たる夏の日

のただなかへ、大きな太鼓のとどろき渡る方角へと」走っていくところで終わる。

「夏の日の夢」はこのように、現実、伝説、そして現実と随想、といういわば三部構成をなしているのだが、第二節の浦島伝説の部分を、ハーンは、次のように始める。

その物語は一度聞いたら忘れることがないだろう。毎年、夏、海辺に来ると (Every summer when I find myself on the coast) 風のない穏やかな日などはことさらに、私はその物語を思い出す。それは心について離れない。古来、様々な形で語り継がれてきたその物語は、おびただしい数の芸術作品に靈感を与えてきた。しかし最も古く最も感銘の深いのは、五世紀から九世紀にかけての詩歌を集めた『万葉集』の中にある歌である。この古い歌を偉大な学者アストンは散文に訳し、偉大な学者チェンバレンは散文・韻文両様に訳した。しかし英語で読む人に一番魅力的なのは、チェンバレンが子供のために書いた『日本お伽話集』の一冊かと思ふ。それにはこの国の画家たちが、彩り美しい挿絵を描いているからである。その小さな本において、私は今一度この伝説を自分の言葉で語ってみよう。

ここでわかるのは、ハーンが、『万葉集』をはじめ「古来、様々な形で語り継がれてきた」浦島伝説の歴史とその広がりについてある程度の知識をもっていたことである。その上で、ハーンは英語の読者に対して、チェンバレンが子供向けに書いた浦島物語を推奨し、あらためて次のように、「自分の言葉で」伝説を語りだす。

今から千四百十六年前のこと、漁師の子浦島太郎は小舟に乗って、住之江の岸をあとにした。

夏の日は今も昔も変わりがなかった。真つ白な雲がいくつか軽やかに、鏡のような海上にかかっているだけで、あとはただ眠るように穏やかな青一色だった。山もまた、今と同じだった。遙かな青いやさしい山々が青い空に融け入っていた。そして風はいかにもものうげだった。

ハーンは、夏の日の変わらぬ海の風景を描き、今でも日本の漁村でみられるような形の舟にのった浦島太郎が亀を釣り上げ、だが放してやったこと、漂う舟のなかで眠ってしまい、気づくと、「まどろむ海の夢の中から」、「海上を滑るように」、「風のように軽やかな足どり」で、「美しい乙女がたち現れた」という。乙女は、竜王の娘であると名乗り、浦島の優しい心を褒め、常夏の島にある竜王の御殿へといざなうて、二人は青い海原を漕いでゆく。

竜王の島についた浦島は、娘と結婚し、すばらしい御殿で、「新しい驚きと新しい喜び」の日々をすごして三年がたつ。だが、浦島は両親のことを思い、「父と母に一言だけ挨拶をしたら、すぐに戻るから」と妻に告げると、戻るつもりなら決して開けてはならぬと、小さな時絵の箱を渡され、ふたたび静かな海を渡って「夏の日の中を」故郷の浜辺に降り立つ。だが、そのとき浦島の心は「大きな当惑 妖しい疑念に襲われた」とハーンはいう。家も村もなくなり、すべてが様変わりしていた。通りがかった老人の話から、浦島はすでに四百年がたつたことを知り、村の墓地で自分と両親の墓石を見つける。浦島は、これはなにか不可解な幻想ではないか、その答えが箱にあるのではないかと疑い、ついに「疑念が信実(Doabt mastered faith)に打ち勝って」(Doabt mastered faith)、思わず約束を忘れ

て箱をあけてしまふ。箱から白い煙が立ち昇り、南のほうへと海上を漂い行くのを見て、浦島はすべてを失ったことを悟り、「絶望のあまり、身も世もあらず泣き叫んだ」が、それもつかのま、「氷のような冷気が血管を走りぬけた」かと思つくと、たちまちのうちに齒は抜け落ち、肌は皺だたみ、髪も白くなつて、力が抜けていき、「四百年の冬の重み」につぶされて死ぬ。「雄略帝の二十一年に丹後の国余社郡の水江の浦島子が小舟にのつて蓬萊の国に行った」こと、そして「後淳和帝の天長二年に浦島子が戻つてきた」ことの記述が古文書にある、とハーンは最後に付け加えている。

ハーンの浦島物語は、ただ日本の古い伝説を紹介するといつてではなく、短編作品といつてもいいような魅力がある。全編を通じて印象的なのは、夏のと海に浮かぶ小舟の光景であり、浦島と竜王の娘が常夏の島へと向かう場面、浦島が一人故郷へ戻る場面、箱の中から白い雲が海のかなたに消えゆくところでも、青い海原の静かな広がり、空と海のかなたに消え入る舟影の情景が一枚の絵のように描かれている。一方、竜王の娘が水面をすべるように登場するくだりはどこか妖精の女王のようでもあり、二人が小舟で漕ぎ行く永遠の島が、アーサー王伝説のなかのアヴァロン島にも重なってくる。疑念にとらわれて、顔の不安がアップでとらえられ、死の場面のスピード感は、映画的でさえある。

さて、ではハーンは「古来、様々な形で語り継がれてきた」浦島伝説の、どれを直接の典拠として、浦島伝説を語つたのか。そのことについて、ハーン自身が前置きの中で言及している。チェンバレンによる子供向けの一

冊子¹⁴ Hasegawa's Japanese Fairy Tale Series の No. 8, *The Fisher-Boy Urashima* (明治十九年) のことである。

縮緬状に加工した和紙を用いた和綴じの小型絵本で、日本人絵師による伝統的な手刷り木版の挿絵が美しく、長谷川弘文社の『日本御伽話集』（明治十八年）、全二十四冊）は、「縮緬本」（Crepe-paper books）と呼ばれて人気があった。海外にも販売網があり、英語以外に独語、仏語、西語版も出して長く版を重ね、伝説や昔話の翻訳の他、『絵で見る日本人の生活』など、日本文化に関するものも多く刊行された。⁽⁴⁾ バシル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain 1850-1935）といえば、『英訳古事記』（A Translation of the "Ko-ji-ki" 1883）『日本口語便覧』（A Handbook of Colloquial Japanese 1887）『日本事物誌』（Things Japanese 1890）『日本旅行案内』（A Handbook for Travellers in Japan 1891, W. B. Mason と共著）などの著書で知られるが、この昔話集には浦島物語の他に『The Eight-Headed Serpent』（『八岐大蛇』）、『The Silly Jelly Fish』（『海月と猿の生き肝』）、『My Lord Bag-O-Rice』（『俄藤太』）の計四点を明治十九年から二十年にかけて翻訳している。ハーンもまた、チェンバレンの紹介なのか、第二集として『The Boy Who Drew Cats』（『猫を描いた少年』）、『Chin Chin Kobakama』（『ちんちん小袴』）、『The Fountain of Youth』（『若返りの泉』）、『Goblin Spider』（『化蜘蛛』）、『The Old Woman Who Lost Her Dumpling』（『団子をなくした婆』）の五巻を出した。巖谷小波の『日本昔噺』全二十四編（一八九四～一八九六）は、長谷川弘文社の『日本御伽話集』に倣った企画だとされ、縮緬本は、出版物として成功しただけでなく、影響も大きかったといえる。

ハーンが、その縮緬本を机上に置いて参考にするにわざわざ断り、浦島伝説を語る途中でも再三言及しているため、これまで、ハーンの「夏の日の夢」の中の浦島伝説は、「チェンバレンの縮緬本「浦島」を原話とした再話」⁽⁵⁾（遠田勝）であるとみなされてきた。

当然、基本的な粗筋の展開は同じである。季節は夏であり、釣り上げた亀を放してあげ、舟のなかで眠り、海

上から乙姫が現れ、舟で海のかなたの島にある竜宮に行く。帰郷した浦島が箱をあけてしまい、絶望して死ぬ場面も同じである。

だが無論、細部の表現の違いも多々あり、これまで、チエンバレンの縮緬本「浦島」とハーン作品は、「二人の個性を比較対照するのに好都合である」として、両者の記述が比較されてきた。仙北谷晃一氏は「こんな小さな作品にもロゴスの人チエンバレンとパトスの人ハーンの違いが感じられる」と評し、ハーン「浦島」の魅力が、たとえば、夏の季節に浦島の赴く「常世」が、the island where summer never dies という表現を与えられ、そのフレーズが歌のルフランのように何度も繰り返されることで、「常夏の国」への憧憬を強めていること、最後、砂浜で息絶えた浦島を打ちひしいたものが、「四〇〇年間の冬の重み」the weight of four hundred winters と記されて、夏と冬が対比されていることから、ハーンが夏に託した意味の重さなどを指摘した。西成彦氏は、その指摘からさらに、ハーン「南方憧憬」をポストコロニアルな文脈のなかに位置づけ、ハーン「浦島」は、いわゆる「南北問題」でいう時の「南」から「北」へと生還したための「凍死」であったとする。そして、長崎の西洋風旅館を逃げ出して三角の浦島屋について、という導入部は、「南」から「北」への移行期にあった明治日本を舞台に、ハーンがこの作品にこめた文明的警告を示すのだ、と論じた。⁽⁸⁾

チエンバレンの縮緬本では、「浦島は約束を守らなかったから、樂園に戻れなくなつたのですよ。ほかですね。みなさんは樂園に行つてみたいと思いませんか」と最後にヴィクトリア朝の子供たちに教訓をたれる。それに対して、「ハーン」の「浦島」が単なる子供向けの話ではなく、解き難い人生への思いを託された「詩」になっている⁽⁹⁾（仙北谷晃一）のは、確かにその通りだろう。だが、縮緬本「浦島」は絵本であり、チエンバレンの文章以上

に、少なくとも同等程度に、絵師小林永濯えいたくの優美な日本画が大きな魅力をなしている。その絵から切り離れたチエンバレンの「子供向け」の文字テキストだけを、ハーンの言語作品と単純比較しても、不十分であろう。

チエンバレンの「浦島」は、特定の日本語原作を英訳したのではなく、長谷川武次郎のプロデュースのもとで、チエンバレンが作文したとされるが、その際にチエンバレンが依拠した素材は何か、という疑問は出てくる。ここで、浦島伝説のいくつかの形と、物語成立の歴史をごく簡単に確認しておきたい。

周知のように、浦島伝説は『日本書紀』、『丹後国風土記逸文』、『万葉集』など古代の文献に登場し、平安朝にも多くの漢文伝があるが、室町時代以降、『御伽草子』によって全国に広まった話である。仙境の女と人間の男の婚姻の物語であり、浦島が赴くのは『万葉集』では常世、『日本書紀』、『丹後国風土記逸文』では蓬莱であるが、どちらも、不老不死の理想郷であり、海のかなたにある。世界訪問と帰郷、現世との時間の相違、神婚譚、タプーの設定などが伝承を構成する要素である。原型の伝承が古代において神仙思想の影響を受けて文章化されたこと、その後、不老長寿の明神として祀られたこと、中世になって、動物報恩譚の要素が加わり、明治時代には、巖谷小波の『日本昔噺』から『尋常小学唱歌』へと、子供向けの教訓的昔話として定着した過程など、浦島伝説が時代とともに変化していく様については、三浦佑之『浦島太郎の文学史』（五柳書院、一九八九年）ほか、数多くの研究がある。そして『日本書紀』、『丹後国風土記逸文』、『万葉集』など古代の伝説と、『御伽草子』に代表される中世の物語とは、異なる部分があり、その主な違いは、浦島（古代では水江浦島子、中世以降、浦島太郎となる）と海神の娘の出会い方、他界の描写、そして最後の終わり方にみられる。まず、古代の形では、浦島が海に出て舟で眠っている間に娘が現れる。『日本書紀』では浦島が吊り上げた大亀が美しい娘に変身するが、『万葉集』で

は、娘は直接海から現れ、亀はでてこない。だが、『御伽草子』では、浦島太郎が釣った亀を放してあげると、その翌日、浜辺にいる浦島のもとに「美しき女房」が小舟で着き、のちに自分が実はその亀であったと明かす⁽¹⁰⁾。そして、浦島が赴く場所が、古代では神仙界の立派な御殿であることを述べるだけだが、『御伽草子』の竜宮城では、東の戸を開ければ春の景色、南側の戸からは夏、西面には秋、北面には冬の景色が展開し、永遠の時間が「四方四季」の景色の描写で表現されている。浦島の最後も、『日本書紀』『丹後国風土記逸文』『万葉集』では箱を開けてしまった浦島は嘆き悲しみ、たちまち老いて死ぬのだが、『御伽草子』になると、その後、浦島太郎は鶴となり乙姫とともに鶴亀の夫婦明神となった、「めでたかりけるためしなり」と終わる⁽¹¹⁾。

チェンバレンの「浦島」をこれら古代・中世の両方の形と比べると、名前が浦島太郎であること、釣った亀を「亀は万年」の寿命をもつから放してあげたこと、さらに娘が助けられた亀であることを告白するところは、『御伽草子』に従っている。だが、『御伽草子』の「浦島太郎」の中でよく知られた「四方四季」の場面も、鶴亀の最後もない。むしろ、舟の中の眠り、海上で現れる海神の娘、そして最後の死の場面の描写など、古代の浦島の要素が色濃い。季節の設定も、『御伽草子』にはなく、夏になっているのは、『日本書紀』の「雄略天皇二十二年七月」という記述にならうと同時に、英語の子どもの読者にとっては、西洋の多くのおとぎ話にみられるように、夏が妖精と出会う異界訪問の季節だからだろう。一方、小林永濯の挿絵を見ると、平安風の十二単をまとった女房姿、寝殿造りの館など、明らかに『御伽草子』の文と挿絵を踏まえていることがわかる。帰郷した浦島が通りかかった老人から数百年の経過を教えられる『御伽草子』の中のくだりも、チェンバレンの文章では、単に村人とあるだけで特に老人ではないにもかかわらず、永濯の挿絵では、『御伽草子』の挿絵と同じ、杖をついた

老人の姿で描かれている。おそらく、長谷川武次郎としては、『御伽草子』の内容にそった子供向けの英訳をチェンバレンと永濯に依頼したのではないか。それでも、チェンバレンが大きく取り入れたのは、『万葉集』などの古代の伝説の方であったということになる。⁽¹³⁾

ハーンもまた、「夏の日の夢」第二節、浦島伝説の前書きの部分で、チェンバレンの縮細本を読者に薦めながら、「最も感銘の深いのは、『万葉集』の中にある歌である」と述べていた。

つまり、二人が共通して頭のなかに描いていた浦島伝説とは、『万葉集』のなかの歌、「水江浦島子を詠める一首並びに短歌」だったと確定していいだろう。セツの回想するハーンが朗唱していたのも、『万葉集』の長歌そのものだった。その歌を、ハーンは心のなかで反芻し続けた。

ここで重要なことは、その「水江浦島子を詠める歌」(以下このように略す)を、ハーンがアストンとチェンバレンの訳を通じて知るにいたったということである。二つの英訳は、それぞれの著書、アストンの *A Grammar of the Japanese Written Language* (『日本語の文法』、一八七二)、チェンバレンの *The Classical Poetry of the Japanese* (『日本の古典詩歌』、一八八〇) に収められている。そして、長崎旅行の前後、ハーンは「The Fisher Boy Urashima」を巻頭に掲げたチェンバレンの『日本の古典詩歌』を読みこんでいるのである。

旅行前、ハーンはチェンバレンに宛てた書簡のなかで、「私は、あなたの『日本の古典詩歌』をもう一度読み返したのです。」(一八九三・六・二五)と述べているが、旅行の後も、ハーンは、チェンバレンが「The Fisher Boy Urashima」に付した註で言及した『日本書紀』*Nihongi* のなかの浦島伝説の記述に関して、*Elysium* のもとの日本語が何かを問い合わせている。箱根滞在中だったチェンバレンは、東京の家から日本語原著を取り寄せ、その

写しをそえて、『日本記 浦島』問題についての回答です」として、チェンバレンが *Byssium* と訳した言葉は「蓬莱」であり、その漢字の横にふつてあるカナ「トヨソクニ」は、*the Evergreen Land* といったほどの意味であると書き送ってきた(一八九三・八・一一付ハーン宛書簡⁽¹⁴⁾)。ハーンはまた、「夏の日の夢」の最後に入れた「若返りの泉」の話についても、その類話を知っていないか、チェンバレンに尋ねており(一八九三・六・一九付書簡⁽¹⁵⁾)、チェンバレンは、折り返し、「日本以外で若返りの水をいっぺんにそんなにがぶ飲みした老婆の話は知りません」(六・二五付ハーン宛書簡)と答えている⁽¹⁶⁾。

七月の長崎旅行の詳細を、ハーンがただちにバジル・ホール・チェンバレン宛七月二十二日付の長文の手紙で報告していることもまた良く知られており、実体験をいかに脚色して「夏の日の夢」に作品化したかは、すでに仙北谷晃一氏によって論じられている。だが、逆に考えれば、書簡での頻繁なやり取りのなかで、ハーンはさらに、構想中の作品のいわば下書きまで、チェンバレンに見せていたということにもなる。それほど、この時期の両者は、知的に近い関係にあったといえるだろう。

「夏の日の夢」という作品について、これまで繰り返し引用されてきたのは、先にも言及した、ギリシャの海とおぼしき海の風景を回想する場合であり、その上で繰り返し指摘されてきたのは、ハーンの臉の母への思慕の念から発する、内なる「樂園憧憬とその喪失の悲哀」が作品全編を貫くテーマだということである。

だが、ハーンが『夏の日の夢』と題して、浦島に関するわが夢想にかかりきりになっておりました。(一八・一六付チェンバレン宛書簡⁽¹⁷⁾)という、その間、ハーンはチェンバレンの著書を読み込み、書簡でも対話を重ねていた。

すでに述べたように、ハーンの「夏の日の夢」は作品集 *Out of the East* (『東の国から』) の巻頭作品なのだが、チェンバレンの『日本の古典詩歌』の中で冒頭に置かれているのも、『万葉集』の浦島の歌である。そしてハーンは、*Out of the East* という著書のタイトルについて、チェンバレンから、*out of the far east, farthest east, utermost east* とした方が、内容を正しく表せたはずで残念だ、と批判された(一八九五・三・一付書簡¹⁸)。ことに対して、「表題は、東方協会 the Oriental Society の標語「光は東方より」*Ex Oriente Lux* に暗示を得たものなのです。」と反論している。(一八九五・三月付書簡¹⁹)。つまり、*East* 東方とは、ただ日本という極東の国の地理的位置を示すものではなく、何らかの啓示の源、インスピレーションとしての東方の光を示唆しているのだということをはハーンは言っている。チェンバレンの方は、ハーンの著書のタイトルを具体的に意味に限定させたかったようだが、実は、チェンバレンの著書『日本の古典詩歌』は、出版社の *Oriental Studies* 叢書²⁰のひとつとして刊行されており、叢書の主旨を表す大きなエンブレムが表紙下半分にある。それは、海のかなたの地平線に光る稲妻の図で、その周りに、*Trubner's Oriental Studies: fulgur exit ab oriente* 「雷鳴は東方より²¹」と記されているのである。もちろん、その意味は、ハーンが手紙のなかで引いた、「光は東方より」と同じである。

東方からの光の輝きを示唆するタイトル、そして冒頭におかれた浦島伝説をめぐる作品。二つの著書における一致は、単なる偶然ではなく、ハーンの念頭にチェンバレンの著書があったのだろう。つまり、ハーンの「夏の日の夢」には、チェンバレンの『日本の古典詩歌』に触発され、感応して執筆したという側面があるのではない。そしてそう考えると、この作品のもつ意味がより深く理解できるのではないか。以下は、「夏の日の夢」と『日本の古典詩歌』冒頭におかれた万葉集の長歌の関係を探ることで、ハーンの語る「浦島伝説」に新たな光を

あてる試みである。

二、ジャパノロジストたちの「水江浦島子を詠める歌」

“The Fisher Boy Urashima” から始まるチエンバレンの『日本の古典詩歌』（一八八〇）をはじめ、アストンの『日本語の文法』（一八七二）などをみて気づくことは、チエンバレン周辺の日本詩歌研究者の間で、『万葉集』の「水江浦島子を詠める歌」を好んで大きく取り上げる傾向があったのではないかということである。

W・G・アストン

「水江浦島子を詠める歌」を初めて英語に訳したのは、英国の外交官ウィリアム・ジョージ・アストン (William George Aston, 1841-1911) であった。アイルランドに生まれ、一八六四年(元治元年)英国公使館日本語通訳生として来日、兵庫領事等を経て、一八八六年公使館書記官となり、一八八九年に帰国。チエンバレン、アーネスト・サトウと並ぶ初期の日本研究者であり、日本アジア協会を研究の場とした。一八九六年の『日本書紀』の英訳 *Nihongi: Chronicles of Japan from the Earliest Times to A.D. 697*、一八九九年の『日本文学史』(A History of Japanese Literature) 一九〇五年の『神道』*Shinto, the Way of the Gods* が主な業績として知られる。

「水江浦島子を詠める歌」の英訳が入っている『日本語の文法』*A Grammar of the Japanese Written Language* (1871) は、アストンの最初の本であり、十章にわたって文法を概説したあと、付録「Appendix: Specimens of

「Japanese」として日本語の例文を九つ、それぞれ原文とローマ字表記のテキストを挙げ、英訳と注釈をつけたものである。⁽²²⁾ その例文の選定が興味深い。まず『古事記』から、イザナギがイザナミを追って黄泉国に下る一節、スサノヲの「八雲たつ」の和歌、次に『万葉集』から「the Legend of Urashima」と題して「水江浦島子を詠める一首並びに短歌」の長歌と反歌、「竹取物語」の一節、本居宣長『玉あられ』から一節、『八犬伝』から一節、そして最後に追悼文、公文書、私的書簡の例をそれぞれ挙げている。アストンは古代から近代までそれぞれの時代の短文を選んでいて、ごく簡単な文学史的説明も添えているのだが、面白いのは、『万葉集』を代表する一首として、浦島伝説を取り上げたことだろう。ハーンは、この本で、「水江浦島子を詠める歌」の日本語原文の読みと逐語的意味を学んだはずである。

そしてアストンがその二十数年後にまとめた一八九九年の『日本文学史』(A History of Japanese Literature)では、第二章「奈良時代」第一節「散文」『古事記』に続く、第二節「詩歌」『万葉集』で、長歌六篇、短歌二十数首を英訳し紹介しているが、やはり、柿本人麻呂の歌の後に、「the Legend of Urashima」を、「これは、よく知られた日本最古の伝説のひとつである。元の話は、万葉集よりさらに古い。」と前置きして、反歌とともに挙げているのである。アストンは、巻末の参考文献のなかでチェンバレンの『日本の古典詩歌』など欧文で読めるものをあげ、真淵、宣長の名に触れたのち、「この分野におけるもっとも重要かつ優れた研究」として、東京帝国大学教授の三上参次と高津敏三郎の共著『日本文学史』(落合直文補 東京：金港堂 一八九〇年、明二十三・十一)をあげて、二人の著書に大きく助けられたことへの謝辞⁽²³⁾を述べている。三上・高津の著書は「日本の文学史の嚆矢にして、量的にも明治年間を通じてこれを凌駕するものはなかったとされる浩瀚な体系的著述」(小堀桂一郎⁽²⁴⁾)で

あり、アストンが使っていた本はケンブリッジ大学図書館に所蔵されていて、沢山の書き込みがあるという。⁽²⁵⁾ アストンは、文学史の章立て、挙げる詩歌の選択などを依拠したと考えられるが、三上・高津の著書の『万葉集』に関する章で挙げている数点の長歌のなかに「水江浦島子を詠める歌」はない。つまり、『万葉集』の四千数百首の歌のなから秀歌として「水江浦島子を詠める歌」を挙げるといふ発想は、特に日本の国文学者に従ったものではなかったといえるだろう。

K・フロレンツ

ハーンにとつては、チェンバレンやアストンの著作以外にも、『万葉集』の中の浦島の歌に対する関心をかきたてるきっかけとなつただろうと想像されるのは、ドイツ人のカール・フロレンツ (Karl Florenz 1865-1939) の松江への来訪である。フロレンツは、ライプチヒ大学で言語学と東洋学を学び、留学中の井上哲次郎と出会つたことから、日本文学研究を志して、明治二十一年(一八八八年)二十三歳のときに来日。大正三年(一九一四年)に最終的に帰国するまで、東京大学の外国人教師としてドイツ語ドイツ文学を教え、チェンバレンの後任として比較言語学の講義も持って、日本ではドイツ文学研究の、ドイツでは日本文学研究の途を拓いた。のちに『古事記』『日本書紀』『古語拾遺』のドイツ語訳 (*Japanische Mythologie, 1901, Die Historischen Quellen der Shimo-Religion, 1919*) と『日本文学史』 (*Geschichte der Japanische Literature, Leipzig, 1906*) ⁽²⁶⁾ を著すことになるフロレンツは、一八九一年(明治二十四年)の夏七月、チェンバレンの紹介⁽²⁷⁾で松江のハーン宅に投宿する。出雲大社への訪問が一番の目的だったが、八日から二十五日に出発するまで、フロレンツは、松江中学校校長の西田千太郎を訪ねて教育

会で西田の通訳で講演し、また出雲言葉の資料も西田から受け取っており、三人で歓談の時をかさねては松江市内を散策した。チェンバレン、アストンとも親しく、風土記、祝詞にも関心のあったフローレンツと、ハーンとの間では話がすんだことだろう。そしてフローレンツはちょうど、この年の四月ころから、ドイツ文学科を卒業したばかりの藤代禎輔の協力によって『万葉集』を読みはじめ、本格的な研究をはじめたところだった。(藤代は、フローレンツのために木村正辞の万葉集の講義に出席し、その内容をドイツ語で伝えたという。)ハーンは、この夏に、あるいはフローレンツから『万葉集』の話聞いたかもしれない。フローレンツは、ハーンの長崎旅行の翌年、その最初の著作である『東の国からの詩の挨拶 和歌集 *Dichergüsse aus dem Osten- Japanische Dichtungen* (一八九四年 明治二十七年)⁽²⁸⁾』という題の美しい縮緬本を出す。その序文で、日本には豊かな詩歌の伝統があり、なかでも、もつとも詩的内容がすばらしいのは、『万葉集』だと述べ、『万葉集』を中心に、『古今和歌集』などからも選んだ詩歌のドイツ語訳を収めたが、ここにもまた「水江浦島子を詠める歌」が入っている。その挿絵は、チェンバレンの縮緬本「浦島」と同じ、小林永濯である。

浦島伝説の英訳

もちろん、浦島伝説自体は、当時来日外国人にむしろよく知られた話であり、チェンバレンの縮緬本以前にも日本の伝説としてすでに紹介されていた。

たとえば、一八七〇年に福井藩に招かれて来日し、福井と東京帝国大学で化学と物理を教えたアメリカ人ウィリアム・グリフィスの日本滞在記『皇国』(*The Mikado's Empire* 1876)には、「昔話と炉端物語」という章があり、

曾我兄弟、大岡越前、舌切り雀、猿蟹合戦、桃太郎、瘤取などとともに、浦島伝説が老婆が語る炉端物語として書かれている。⁽²⁹⁾

また、一八七二年に京都療病院に招聘されたドイツ人医師フェルディナント・ヨンケル・フォン・ランゲツグ (Ferdinand A. Junker von Langegg 1828-1901) は、四年間の滞在中、診療と医学教育のかたわら収集した日本の民話伝説、歴史上のエピソードなどを『扶桑茶話』(Japanische Thee-Geschichten: Fu-So Cha-Wa) と題して、一八八四年(明治十七年)にウィーンで出版し、全三十一話のなかに「漁夫浦島」を納めている。⁽³⁰⁾

チェンバレンの縮刷本『浦島』⁽³¹⁾が出た明治十九年には、アメリカの *Century Illustrated Magazine* に「日本のリップ・ヴァン・ウィンクル 浦島」という題で挿絵入りの浦島伝説が片岡政行翻訳で掲載されており(林晃平『浦島伝説の研究』による)⁽³²⁾、さらに、イギリスの『アンドリュウ・ラングの世界童話集』十一巻本 (Andrew Lang's Colored Fairy Books, 1889-1910) の第四巻 (The Pink Fairy Book 1897) にも、そしてフランスの挿絵画家エドモン・デュラックの豪華絵入り『世界おとぎ話集』(Edmund Dulac's Fairy-Book, 1916) でも、浦島伝説が日本の話として入っている。

このように、浦島伝説が日本の昔話のなかでも特に広く知られるようになったのは、いわゆる「異郷滞留物語」に分類されつる話の要素がそろって、筋が親しみやすいからだろう。「異郷滞留物語」は、旅行者、船乗りが道に迷い、異郷の山奥、または遠島にたどりつき、娘と結婚し、故郷に戻ると実は数百年のときを経ていたという物語だとされる。ハーン自身、後に、東京大学における講義、小説における超自然的なもの価値⁽³³⁾、文学の解釈⁽³⁴⁾の中で浦島伝説とリップ・ヴァン・ウィンクルの物語やマリー・ド・フランスの古歌などの類似性に言及して、古今東西にみられるこつした伝説の普遍的な魅力について述べている。⁽³²⁾ イングランド、スコットラ

ンドに古くから伝わるバラード「歌人トーマス」やアイルランドのオシーン伝説と浦島伝説との類似性についても、土居光知氏などによつて指摘されてきた。⁽³³⁾

だが、チェンバレンらが『万葉集』の長歌「水江浦島子を詠める歌」に惹かれたのは、その伝説内容、つまり浦島伝説の普遍性だけではないのではないか。チェンバレン、アストン、フローレンツは互いに親しく、研究の手法も、チェンバレンら英米人の日本アジア協会に対して、フローレンツはドイツ東洋文化研究協会（通称 OAG 一八七三年、東京大学医科大学外国人教師エルウィン・ベルツらを中心に創設された）の例会で研究成果を発表する、というように似ていた。そして彼ら初期のジャパノロジストたちには、共通して、『万葉集』の「水江浦島子を詠める歌」への関心があつたといえる。ハーンの「夏の日の夢」の背景には、こうしたチェンバレンら、日本研究者たちの「浦島」の歌への共鳴が土台としてあり、そのうえに描かれたものだとすることを押さえておく必要があるのだが、彼らの共感は、浦島物語そのもの以上に、「水江浦島子を詠める歌」であること、つまり、伝説を語る詩人の視点にあつたのではないかと思われる。そして、そのことをはっきりとあらわしているのが、アストンやフローレンツの忠実な訳に比べて、「はなはだ自由な訳」とのちにアーサー・ウェイリーに批判をこめて評された、チェンバレンの訳なのである。

(以下 次号)

「参考文献」 (本文中および註にてあげたものは省略)

・林晃平『浦島伝説の研究』、おつふう、二〇〇二年

海界の風景 (一)

- ・川村ハツ工「先駆者たちが見た能楽」、野上記念法政大学能楽研究所編『外国人の能楽研究 二二世紀COE国際日本学研究叢書1』、法政大学国際日本学研究センター刊二〇〇五年
- ・佐藤マサ子『カール・フロレーンツの日本研究』春秋社、一九九五年
- ・佐藤マサ子『カール・フロレーンツの万葉集研究』
『御茶ノ水女子大学大学院 人間文化研究科年報』十号、一九八七
- ・富士川英郎『フロレーンツと日本語』『西東詩話 日独文化交流史の側面』、玉川大学出版部、一九七四年
- ・小堀桂一郎『K・フロレーンツの「李白・巽軒詩抄」』『比較文学研究』二十七号、東大比較文学会、一九七五年
- ・石澤小枝子『ちりめん本のすべて 明治の欧文挿絵本』三弥井書店、平成十六年
- (1) 小泉節子「思い出の記」、平川祐弘編『小泉八雲 回想と研究』講談社学術文庫、一九九二年、五八頁
- (2) *Dream of a Summer Day, The Writings of Lafcadio Hearn, vol. 7* 仙北谷晃一訳「夏の日の夢」平川祐弘編『日本の心』講談社学術文庫。以下の訳も仙北谷晃一訳による。部分的に手を加えた所もある。
- (3) 遠田勝「東の国から」、平川祐弘編『小泉八雲事典』五〇五頁。印象主義的紀行文集である『知られぬ日本の面影』から、夢想に綾とられた研究の方向へと向かう里程標的作品』であると遠田氏は位置づけた。
- (4) 長谷川弘文社の縮緬本と、その企画者長谷川武次郎については、石澤小枝子著『ちりめん本のすべて 明治の欧文挿絵本』(三弥井書店 平成十六年)に詳しい。
- (5) 遠田、同前
- (6) 西成彦「怪談 浦島太郎」『耳の悦楽 ラフカディオ・ハーンと女たち』、六八頁
- (7) 「ハーンと浦島伝説 『夏の日の夢』の幻」『人生の教師 ラフカディオ・ハーン』恒文社、一九九六年

(8) 西、同前

(9) 仙北谷、同前

(10) 市古貞次校注『御伽草子』(下)、岩波文庫、一九八六年、一六一頁

(11) 『万葉集』「浦島子の歌」には、「かき結び 常世に至り 海若の 神の宮の 内の重の 妙なる殿に携はり 二人入り居て 老いもせず 死にもせずして 永き世に ありけるものを」とあり、『日本書紀』では、「蓬萊山に到りて、仙衆を歴り觀る」となっていて、『丹後国風土記』逸文では、「天上の仙の家」「蓬山」「仙都」「神仙の堺」を訪れたとする。

(12) さらに、現代の子供向けの話の形にとのえられていくのが、明治時代であり、浦島太郎は悪がきにいじめられていた亀を助け、その亀の背中によって、海底の竜宮城へ行き、乙姫からお礼の接待をつける。乙姫は亀ではなく、乙姫との結婚も影をひそめ、玉手箱をあけてしまったところで終わる。なお、玉手箱は、お土産として渡されるようになり、この場合、亀を助けたお礼なのに、箱の中に富や幸せが入っているのではなく、最後は年老いてしまうという話の矛盾については、三浦氏はじめ多くの人が言及している。

(13) 林晃平『浦島伝説の研究』によれば、チェンバレンの縮緬本「浦島」には、『御伽草子』のほか馬琴の『燕石雜誌』をも参照した可能性があるという。なお、竜宮の描写に妖精の城のような表現があることを、林氏は指摘している。

(14) 『ラフカディオ・ハーン著作集 第十五卷』恒文社、一〇三頁

(15) 同右、五三頁

(16) 同右、六七頁

(17) 同右、一〇七頁。ポストンに原稿を送ったことと、『日本書紀』のテキストを送ってくれたことへの礼も述べている。

海界の風景 (一)

- (18) 『ラフカディオ・ハーン著作集 第十五巻』 一五〇頁。
- (19) ハーンは同じ手紙のなかで、チェンバレンの提示した、the far east はすでに他の人々の専用語になっている、far-theft east, uternmost east は耳障り、効果的でない、などとひとつひとつ、否定して、「表題は、簡潔であって漠然としているほど良いのです」と自信を示した。(『ラフカディオ・ハーン著作集 十五』、一五一頁)
- (20) この叢書では、Japan in 3 Volumes と題して、チェンバレンの著作と、里見岸雄の英文著作二点、*Japanese Civilization, Its Significance And Realization*、*Discovery of Japanese Idealism* が一揃セットになっている。
- (21) 『アタラシキ福音書』二四章 一七 *Sicut enim fulgur exit ab oriente, et parat usque in occidentem: ita erit et adventus Filii hominis* (ちよびや、稲妻が東方から出て西方に輝き渡るように、人の子も現れるのである。)による。
- (22) *A Grammar of the Japanese Written Language*, London, Luzac&Co, 1872: 3rd edition, 1904
- (23) *A History of Japanese Literature*, London, Heinemann, 1899, p. 401
- (24) 小堀桂一郎「K・フロレンツの謡曲研究」『比較文学研究』三九号、九九頁、一九八一年四月
- (25) P・F・コーニッキー「ウィリアム・ジョージ・アストン」、ヒュー・コータツツイ&ゴードン・ダニエルズ編『英
国と日本 架橋の人びと』思文閣出版、一九九八年、一一七頁
- (26) この著書の末尾に、フロレンツは、アストンの『日本文学史』を参考にしたことへの謝辞を記している。フロレンツの『日本文学史』は、また、東京帝国大学文学部の同僚の国学者からの助力をえて彼らの研究成果をもふまえたものでもあり、その後長くドイツにおける日本学の重要な基礎的文獻であり続けたといつ(小堀)。
- (27) 七月前後の、ハーンとチェンバレンの往復書簡では、フロレンツ滞在についてたびたび言及している。
- (28) 縮緬本としては大著(九七頁)のこの日本詩歌選集は、「愛情」、「自然」、「人生」、「宮廷詩」、「諸々の詩」、「叙事詩」といふ六つの章からなり、山上憶良や大伴家持などの長歌、反歌に詠み人知らずのものも含め、『万葉集』の歌

が多くを占めている。また、『古今和歌集』からも壬生忠岑や紀貫之らの歌が選ばれ、新しいものとして、「一八五五年十月二日の地震（安政二年の大地震）」、「桶狭間の夜戦」といった新体詩も載せている。美しい挿絵は、三島篤窓、新井芳宗、鈴木華邨、小林永濯等が担当し、巻末に画家の説明がある。良く読まれ、一九二二年には十四版が出ている。また、文科大学の同僚でOAGの会員でもあったアーサー・ロイド Arthur Lloydの英訳によるフロレーンツの英語版 *Poetical Greeting from the Far-East: Japanese Poems 1896* も出た。

(29) グリフィス『明治日本体験記』山下英一訳、平凡社東洋文庫、一九八四年

(30) 奥沢康正『外国人のみたお伽ばなし 京のお雇い医師ヨンケルの』扶桑茶話』、思文閣出版、一九九三年。この書は、第一部 ヨンケル著『扶桑茶話』の全訳、第二部 著者による解説とヨンケルの略伝、資料集が添えられており、これまであまり知られてなかったヨンケルの人物にはじめて光をあてたものである。ヨンケルは、序文で、「風俗習慣、日常の雑踏、国や家庭の祝祭の様子を織り交ぜ、自分の見聞したことや解説を加えて、自分の話を民俗学的に興味のあるものにした」と記しており、浦島伝説についても、古くは日本書紀における記述、『万葉集』の歌にみられ、後世様々なバリエーションで語り伝えられていることを解説した上で、リップ・ヴァン・ウィンクルの伝説を想起させると述べた

(31) *The Century: a popular quarterly*, vol. 32, issue 2 (June 1886), "Bric-A-Brac: Urashima: A Japanese Rip Van Winkle" [pp. 329-331]

(32) 「夢のなかで若返った老人が、目をさましてみると、冷酷で動かしやうのない現実があるばかり」という筋で、「語られるのは、夢の持つ真実性」である、と述べている。(『ラフカディオ・ハーン著作集 第七巻』恒文社、一二二頁)

(33) 「神話・伝説の伝播と流転」『土居光知著作集 第三巻』一一六・一一七頁 岩波書店 一九七七年